

# 文化高知

2000年7月 NO.96



「鬼灯」大黒郁代

〈もくじ〉

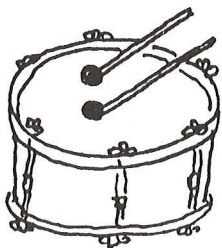
子どもという希望	大崎博澄	2
あしの高知	東川 孝	3
世界へ発信「奥村多喜衛とハワイ日系移民展」	中川美佐	4～5
魚談義あれこれ①世界の魚	岡村 取	6～7
まごころ観光をめざして	岩崎義郎	8～9
こども読書年によせて	田島真紀	10～11
お誕生日	上田真弓	12
ぐうの音も□ - 詩作りと誌作り -	西岡寿美子	13
風俗歳時記・風伯		14～15

(財) 高知市文化振興事業団

# 子どもという希望

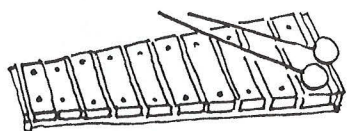
大崎博澄

この四月から責任の重い任務をいただいた。人に会う機会も一段と多くなるので、名刺をお渡しする時、何がしか自分の気持ちを添えたいと思っ、いろいろ考えた末に、新しく作る名刺の隅に、「子どもという希望」という言葉を入れてもらった。



間に書かれたエッセイのタイトルからの借用である。その時、これはいい言葉だなあ、と思ったので大事に心にかけておいたのである。仲良しの大原さんだから、まあかまろう、と、横着にお断りもせずに使っていたが、高知新聞の夕刊コラムに谷脇守記者がこの名刺のことを書いてくださったので、あわてて大原さんに電話してお許しをいただいた。あの名刺をくださいとおっしゃる方も現れるようになり、残りわずかになってしまった。

現場主義、というのが自分の仕事のひとつのやり方である。忙しいスケジュールの合間を縫って、とりあえず学校現場をみたい。それも、養護学校を先にして欲しいと、担当の方にお願いして、これまで、盲学校、江の口養護学校、山田養護学校、日



高養護学校、若草養護学校、土佐希望の家、高知医科大学の小児科病棟、ろう学校、療育福祉センターなどをお訪ねした。

先生方や寮母さん、調理の皆さんなど、スタッフあけて、マンツーマンで献身的な指導をしてくださっている。入学して二カ月、だいぶん首が座ってきました。少しずつ咀嚼ができました。風船を目で追うようになりました。そういうお話を嬉しそうにしてください。

どの子どもにも、その子どもだけの、かけがえない可能性がある。希望がある。養護学校を回りながら、教育の原点のようなものを実感した。

ぼく達は今、見せかけの繁栄、虚

構の豊かさの陰で、まことに希望の少ない時代を生きていると、言えないだろうか。戦後の我が国の驚異の復興を支えてきた政治や経済の仕組みの予想もできなかったもろさ。それを動かしてきた政治家、ビジネスイリート、高級官僚達の底なしの腐敗。これまで確かだと信じられてきたもので、確かなものは何もない世紀末。

今その時代の不安の暗部を露わにするような、十代の少女少女が関わる、大人の常識をくつがえすいたましい事件が連続している。各界の専門家がさまざまな分析や感想を述べているが、少女少女達の心の闇の深さ、広さ、大きさ、その全容を正確にとらえることは難しい。

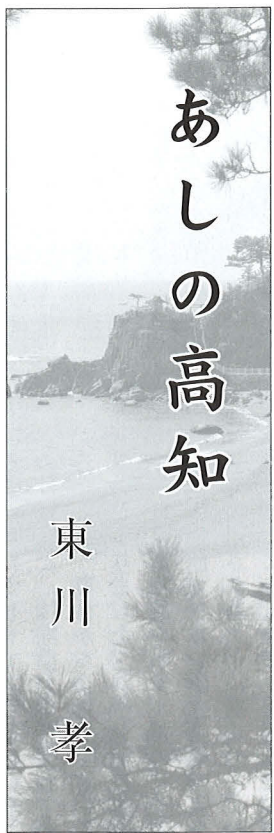
ただひとつ、間違いなく言えることがある。今問われているのは、子ども達の問題でなく、大人達の生き方の問題であること。そして、希望の少ない時代なればこそ、ぼく達は子どもという希望を見失ってはならないということ。

小心なぼくは、時々、これからの仕事の責任の重さを思ってたじろくが、養護学校の教室で声をかけてくれたいくつかの顔が、ぼくに希望という勇気をくれる。

(おおさきひろすみ／高知県教育長)

# あしの高知

東川 孝



高知空港に降りてまず感じるのは、太平洋から吹きつける、暖かい南国特有の潮風である。あしはこの潮風がたまらなく好きだ。

高知―千歳間の直行便が開設されたのは、平成八年四月のことである。ふるさとがげに近くなったようで、とにかくうれしく感じた。

現在、高知―千歳間七万一千人が利用している空港である。

## 千歳と高知県

明治二年北海道の開拓を計画した当時の政府は、千歳に高知藩の開拓者を入植させ開墾を始めた。記録によれば、開拓関係者(役員・大工・農民)五十人が出張し、まず役所建設のため大工小屋を建て、役宅、農夫小屋などを造ったとある。ところが廃藩置県によって二年後の明治四年八月に高知藩は引き上げ、千歳は開拓使札幌本庁が引き継ぐことになった。

しかし短い期間ではあったが、最初の千歳開拓者は高知藩であった。

## 祖父のふるさと佐川町

平成三年四月、わたしが千歳市長に当選したとき、北海道高知県人会から県人会顧問就任要請があった。それは先代が高知県出身者だからである。ここに祖父東川鐘鹿の日記がある。

それによれば、祖父の出身地は高岡郡佐川村柳瀬四十三番地とある。父久太郎と称し、田畑数十町歩を有し、自作農を営み、専ら養蚕業に従事する。

明治二十七年武市安哉先生の紹介によって、同年四月九日浦戸港出帆、神戸―横浜―函館―小樽を経て、四月十九日月形村ウラウスナイ武市農場に着く。その後、浦白町で養蚕業を中心とする農業を営んでいたが、その頃の浦白町周辺は石狩川の度重なる氾濫

や冷害、バッタの大量発生によって営農意欲なくし、土地を母方の親戚に譲り、浦白町を離れ千歳に落ち着いたと日記にある。

どうして千歳に来たかは定かでないが、千歳は明治初年高知藩支配であったことに関係しているのではないかと考えている。また一説には、浦白町で酒に失敗して土地を離れたとも言われているが、今となってはわからない。

佐川町は、二度訪問したことがある。「酒蔵と文教の町」である。酒は名酒「司牡丹」、そして「青山文庫」はマチの誇りであり、春の桜は多くの人々を楽しませている。この佐川町には先代東川鉄右衛門の墓があり親戚の方に管理をお願いし、げに感謝にたえないところである。

## YOSAKOIソーラン祭り

北海道では、いま新しい祭りとして「YOSAKOIソーラン祭り」が注目を集めている。この発案者は北大生であった長谷川岳氏で、平成四年にスタートした祭りである。

平成七年十月頃この長谷川さんが突然わが家に現れ、「高知県人の市長にたのみがある。千歳にもYOSAKOIチームをぜひ結成してほしい」との要請を受けた。

ただちに関係の方々や相談し、平成八年に一チームを結成、その年六月札幌での本祭に出場、新人賞を受賞し、げに一同喜んだものである。

現在、千歳ではチームが増え、六チーム四五〇人が本年の本祭に向けて、それぞれ猛練習をしている。

因みに、本年開かれる第九回Y O



SAKOIソーラン祭りの出場チームは、最多の三七五チーム、約三八〇〇〇人が出場することである。盛会な祭りであることを期待している。

終わりに、高知と千歳の交流がますます盛んになることと高知県のさらなる発展を願ってペンを置く。

(ひがしかわたかし／千歳市長)

# 世界へ発信

## 「奥村多喜衛とハワイ日系移民展」

中川 芙佐



二〇〇〇年三月二十五日から五月七日まで高知市立自由民権記念館で開催された「奥村多喜衛とハワイ日系移民展」は、高知に生まれ、一八九四年ハワイに宣教師として渡り、高知城を模したマキキ聖城基督教会を建て、生涯をハワイ日本(系)社会のために捧げた奥村多喜衛(一八六五―一九五二)を顕彰する日本初の展示会でした。

顕彰展の話が持ち上がったのは一九九九年六月。当時高知新聞に連載中だった拙稿『土佐からハワイへ』の資料収集のためハワイに出かけ、マキキ聖城基督教会教会資料室の膨大な資料を見学したおり、『恩寵七十年』(奥村多喜衛著・一九三五年)の中に見つけた「西原清東」というサインがきっかけでした。帰国後高知新聞社の雪本信彰学芸部長に、西

原サイン発見を中心に帰朝報告をしている際に、未公開の資料を借りて日本初の奥村資料展をしようという話になったのです。

その根底には「ハワイで日本語学校や日本人病院を設立し、一九二〇年代の日本人排斥運動を阻止するため、日本の渋沢栄一やアメリカのシドニー・ギューリックらと協力して、ハワイで排日予防運動を展開し、アメリカ人としての二世教育を行うなど多くの業績を残しているにも拘わらず、奥村が日本で知られていないのは残念だ。国際協力が叫ばれている今こそ、奥村から学ぼう」という思いがありました。ロサンゼルスのみ全米日系博物館やホルルのビショップ博物館で日本(系)偉人の一人として展示されたことはあるのですが、奥村個人に焦点をあてる展示は、前

例がありませんでした。実は、一九九五年ハワイ島日本人移民資料館の大久保清館長(一九〇五年新潟生まれ、ハワイ日本人史の語り部)に初めて会った時「高知で奥村先生は有名じゃろう」と言われ、私は返事に困った経験があります。以来、奥村牧師の故郷での掘り起こしをしたいと願っていました。

まずマキキ聖城基督教会とハワイ島日本人移民資料館から展示資料を借りる許可を得ました。そして有志で結成された実行委員会が、運搬や展示費用のための募金活動を開始しました。この中心となったのは、同志社同窓会高知支部長の太野牧子さん。市民活動においては全くの素人である太野さんが大役を引き受けたのは、同志社土佐人として先輩の奥村多喜衛を顕彰し、高知発信で世界

に伝えたいと望んだからに他なりません。行く先々で「奥村多喜衛ってどんな人?」という質問を受けながら、無我夢中で走ったといえます。

やがて実行委員会の動きを知ったハワイの奥村基金から五千ドルの寄付が送られてきました。同基金は米国内の教育や社会福祉のために奥村牧師の遺産で設立されたもので、海外への援助は初めてでした。一方、高知でも奥村多喜衛の名前が浸透し、募金が集まり始めました。「国際交流の父」として奥村多喜衛を世界に紹介する役目を、多くの高知県人が引き受けた証でした。

三月二十五日、草の根活動に支えられた奥村展の初日には、全国から二百余名が会場の自由民権記念館に集合し、式典の後ハワイアンソングやフラダンスに包まれて和やかなスタートを切りました。四月一日にはハワイ

のマキキ聖城基督教会から黒田朔牧師夫妻を先頭に約三十名の訪問団が高知。昼間の「奥村多喜衛の残したものと題するシンポジウム」に続き、夜には「奥村多喜衛とハワイ日系移民展」の支援者約三百名が集い、ハワイと高知の友好を深めたのです。

この日、初めて高知を訪れたハワイやアメリカ本土在住の奥村牧師の孫・曾孫が、日本各地から集合した奥村一族と、泣き笑いのご対面をしました。それまで存在さえ知らなかった親族間のワールドワイドな交流の始まりでした。

展示終了後の五月十三日、高知海洋高校の実習船土佐海援丸が、奥村牧師の軌跡を綴った『土佐からハワイへ』(実行委員会発行・日本語英語合本)三百二十冊を積んでハワイへ向けて出帆しました。百六十年前にハワイに辿り着いたジョン万のそれを彷彿させるこの船出は、二十一世紀を担う若者たちの新しい交流の始まりでもありました。さらに奥村展を通して友好を育んだ人々が個人的にマキキ聖城基督教会を訪れ、大歓迎を受けています。また十月末には高知県国際交流協会が創立十周年記念行事としてハワイツアーを計画中で、奥村牧師を通してハワイと土佐の輪が広がります。



シンポジウムで発言する黒田朔牧師

現在、実行委員会は頂いた寄付の一部で、奥村多喜衛データベースを制作中です。これによって高知が奥村研究のメッカになる日も近いのではないのでしょうか。

なお、六月二十五日から七月九日まで、奥村牧師の出生地安芸郡田野町のふれあいセンターにおいて田野町バージョン奥村展が開催されています。

ながわふさ／高知大学非常勤講師



高知新聞社を表敬訪問したマキキの訪問団のメンバー

# さかな 談義あれこれ

## ① 世界の魚

岡村 収

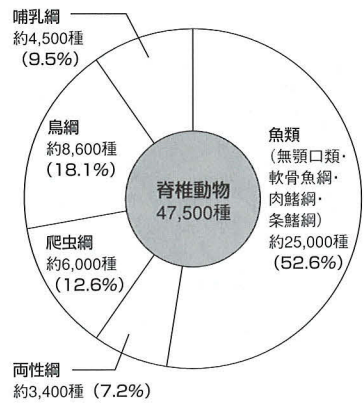
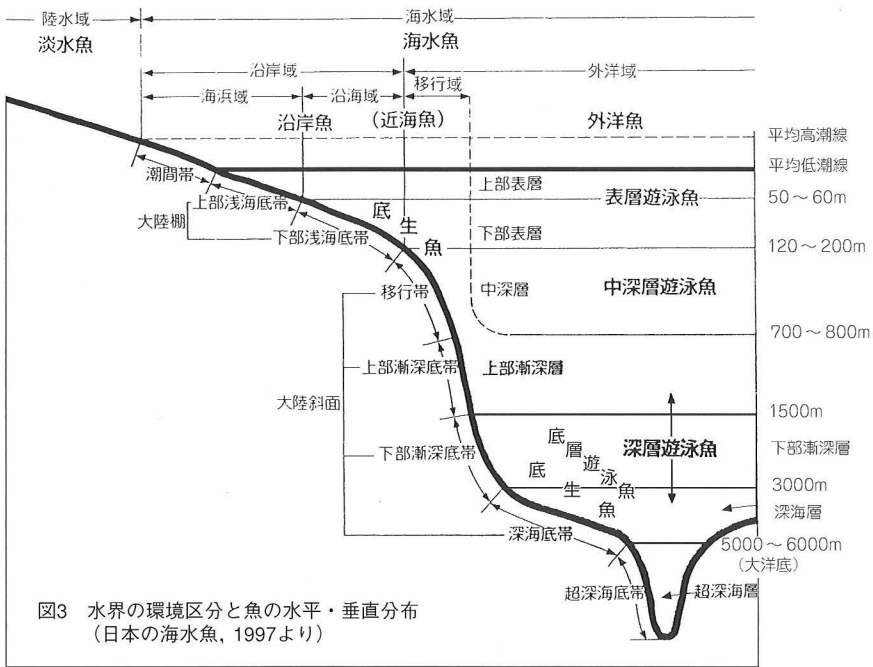


図2 脊椎動物の総種数と各分類群の種数およびその割合 (日本の海水魚, 1997より)



また、卵生から卵胎生、胎生にまで及ぶ繁殖機構の多様化と保育機構の発達も、新環境への進出と世代維持を助長したとみられる。その結果、形態

地史年代を追って、各脊椎動物群の栄枯盛衰ぶりを見ても、哺乳類や鳥類、両生類やヤツメウナギ類は平衡状態か、やや先すぼまりの状態にある。これに対し、一般の硬骨魚類のみは完全な末広りの状態にあり、繁栄を誇っているのである。

さらに、人間と同じ気圏に棲む哺乳類や鳥類では、イリオモテヤマネコやヤンバルクイナのような新種が発見されると二十世紀最大のトピックスとなる。しかし、水圏という異質の世界に棲む魚類は、調査研究の進展につれて漸くその全容を現しつつあり、年間なんと二〇〇〜二五〇もの新種発見が報告され続けているのである。わずか五年で一、〇〇〇種が追加されることになる。このよ

うな一般の硬骨魚類の爆発的進化は七千万年前の白亜紀に開始され、現在に到っている。

進化の要因として、運動器官である鰭や、体の防御を司る鱗の発達なども挙げられるが、なんとと言っても捕食機構である口器の改善が大きく

作用したとみられる。硬骨魚類は、凹口類とも呼ばれるメクラウナギやヤツメウナギ類には無かった両顎の骨を獲得し、口の開閉が自由となり、さらには上顎の突出機能を備えることで、捕食の方法が多様化したのである。くわえる、噛むに加えて、削る、ついでむ、吸引するなど

的・生態的分化の度合いも極めて大きく、体長一・五センチで成熟するハゼ類から二メートル、二五トンに達するジンベエザメまで、上下幅の大きさは他の脊椎動物ではまず見られない。水平的には、両極洋から熱帯域まで、垂直的には標高五、〇〇〇メートルのヒマラヤ峡谷から水深一、〇〇〇メートルを超える日本海溝の最深部まで進出を果たしているといわれる(図3)。

陸地と異なり、海はどこかでつながりをもつ、つまり七大洋と言われ、海は一つである。水平的・垂直的にどのような生態区があり、それぞれにどのような魚が生息するかを究めるのが我々の責務である。

高知の魚を知るには日本の魚を、日本の魚を知るには世界の魚を知る必要がある。高知大学理学部海洋生物学講座(当時)はこの信念をひきつぎ、日本の二百カイリ水域はもちろんで、中・西部太平洋、オーストラリア・ニューギニア・インド洋、中・東部インド洋、アフリカ周辺、そして遂には地球の反対側、グリーンランド周辺水域へと、魚類相と水産資源の調査範囲を拡大し、成果をあげつつあるのである。

おかもらおさむ / 高知大学名誉教授

魚の調査研究に長年携わっていると、報道機関はもとより、一般の方からも実にさまざまな問い合わせが寄せられてくる。その内容は多岐にわたり、見たこともない魚が獲れたという知らせに始まり、専門外のエビ・カニ・貝その他もろもろについてであり、時にはカツオノエボシ(刺毒をもつクラゲの一種)に刺された場合の治療法にまで到る。思うに、これはどうも「魚介類」という一般用語がなせるわざらしい。つまり、魚の研究者は、魚介類全てに通じている、という世間の受け止めである。

しかし、魚だけでも二五、〇〇〇もの現生種が存在し、サメ類・エイ類・ニシン類・タラ類・タイ類・サバ類など、それぞれの分類学者が存在し、淡水魚と海水魚、浮き魚と底魚、回遊魚と定着魚の別にそれぞれ生態学的研究が行われているのである。この全域をカバーできる人物がいるはずもない。

魚とは？、どのような生き物であるのか。生涯水中に棲み、主として鰓呼吸を行い、四肢を欠き、運動器官として鰭をもつ脊椎動物であると規定できる。このカテゴリーに含まれるものとして八つの動物群が該当し、その一つは地球上最初の脊椎動物として、カンブリア紀(約六〜五

億年前)に出現している。誕生以来たかだか四〜五百万年に過ぎない人類の百倍以上の歴史をもつ大先達である。この八つのグループのうち、メクラウナギ類、ヤツメウナギ類、サメ・エイ類(軟骨魚類)、条鱗類(ニシン・サケ・タラ・スズキ・ヒラメなど普通の硬骨魚類)、肉鱗類(胸鰭と腹鰭に肉質の柄状部をもつ特殊な硬骨魚類、シーラカンスと肺魚)の五つのグループが現在でも生

魚類と呼ばれるこれらの水生脊椎動物は、哺乳類など陸生脊椎動物も合わせた全脊椎動物約四七、五〇〇種の五三%近くを占め、実に二五、〇〇〇にも達している(図2)。その内訳はメクラウナギとヤツメウナギを合わせて八四種、サメ・エイなどの軟骨魚類約八五〇種、シーラカンスや肺魚などの特殊硬骨魚類七種で、残る約二四、〇〇〇種は条鱗類と呼ばれる普通一般の硬骨魚類に属し、全魚類の実に九六%を占めてい

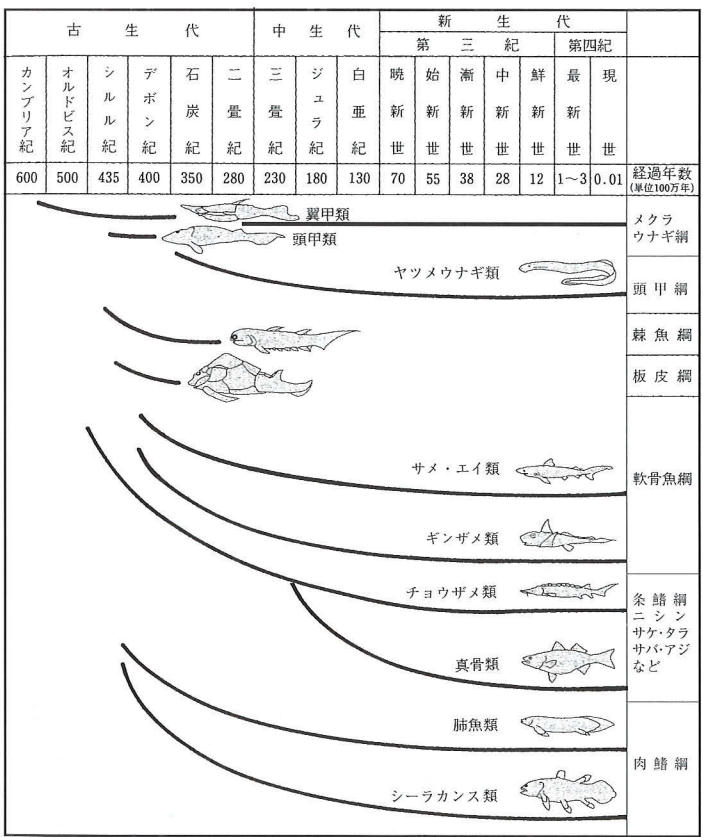


図1 地史年代区分と魚類の進化 (原色日本海水魚類図鑑, 1985より改変)

# まごころ観光をめぐりて

岩崎義郎

昭和六十三年、高知市によって開催された第一回土佐観光大学の募集案内には次のような文章が書かれていました。

「瀬戸大橋が開通し、四国横断高速道路完成を目前に、高知を訪れる観光客はいちじるしく増加し、未曾有の活況を呈してきております。それに対して、県民ひとりひとりが観光ガイドとなって『君よ知るや南の国』のゆめを、実(げ)に真実(まこと)の土佐人気質で応対説明できるようにと、ここに市民観光ボランティア養成講座を開設しました。是非ご参加下さい。」

私自身は、この前年永年勤めた会社を定年になって、視野の狭い会社人間から社会人間への転換を模索する中で、一人ぐらい歴史も語れるガイドがあってもいいのではないかとひそかに思っていた矢先でしたので、早速応募しました。

十一月から翌年三月まで、十二日間の講義と、バスに乗っての実地研修を経て修了認定を受けた五十三人のうちの有志四十七人で同年四月、土佐観光ガイドボランティア協会が発足しました。観光大学は大変好評でその後第五回まで開講され、最初からの協会加入者は百九十七人になります。高知者中心のため退会す

る者も多く、今年四月現在の会員数は九十六人で、男子三十八人、女子五十八人、平均年齢は六十三・五歳となっています。

最近各地にボランティアでガイドをする組織ができております。しかし、私たちの発足当時はまだ全然ないといつてよい状態でしたので、活動の仕方などもまったく手探りで始めたのですが、珍しさも手伝って再三マスコミにも取り上げていただき、思ったよりは順調にガイド依頼がありました。

申し込みを受けてご案内する一般ガイドは、最近の八年間では平均九十件ぐらいとなっていますが、活動の中心としてガイドの件数増加を図るべく、チラシを配ったり、よさこいネットに登録したりして情報発信に努めております。一方、攻めの活動でできるだけ会員の出番を増やそうと、結成翌年から高知城内に臨時案内所を設けて、高知城のご案内とともに県内の観光地案内を開始しました。現在は毎週土曜・日曜に各三人が詰めて対応しております。

次第に社会的認知を受けて活動分

城・高知駅の臨時案内所協力などを行います。なかでも活動の中心は長浜に設けた臨時駐車場から桂浜までの無料バスに乗り込んでのガイド活動です。多いときには一人あたり十二回ぐらい桂浜に往復しますが、車内案内もなかなか好評で、最初は及び腰でスタートした者も、一生懸命のガイドにお客さんから拍手をいただいたりしますと、疲れも忘れて頑

張ることになります。平成十一年度は年間延べ千四十一人が出勤しておりますが、このことは少なく見積もっても二万人以上の観光客と接触を持つわけで、まごころ観光の第一線で直接観光客に接する機会を持つ私たちの態度が、土佐観光のイメージに大きな影響を持つという自覚を持って、おせっかいの心を忘れず応対にあたることにして

上手なガイドはできませんが、土佐の言葉と人情にじかに触れられることが、好評の原因ではないでしょうか。ガイドの態様も様々で、観光バス・ジャンボタクシーなどの団体もあれば、一対一で対話をしながら歩くといった場合もあります。ガイドしたお客さんから後日お礼状をいただいたりしますと何よりも嬉しく、多くの会員が宝物のように大切にしています。「高知城で聞いた一豊の妻のようにになりたい」とか「龍馬さんの銅像に感激」などに加えて「是非また行きたい」というものも多く、次は御指名となる場合もあります。結果的にはお客さんから元気をいただいたているわけで、私たちにとつても生涯学習、生きがいづくり、もつと活動だと思っております。

会員には一定額の交通費を支給することにしており、始点・終点が市内中心部以外の場合を除き、すべて無料でお引き受けしておりますので、ぜひ御利用いただけますよう。お申し込み・お問い合わせは桂浜観光案内所(088-842-0081)へどうぞ。



毎週日曜日は高知城板垣像前でスタンバイ。「御利用をお待ちしています」

一般ガイドで私どもの目指すのは、いわば一品料理のガイドで、お客さんのあらゆるニーズに対応できるように、一般観光はもちろん、龍馬ファン、城や史跡、維新志士の足跡を訪ねる旅など、あらゆるご希望に沿えるように資料集めや研修を重ねております。決して

「いわさきよしろう／土佐観光ガイドボランティア協会会長」



武者姿の橋本知事とガイドの皆さん(平成12年4月、お城まつりで)

野も拡大し、現在は高知公園観光案内所と桂浜観光案内所の業務委託を受けているほか、高知コンベンションビュローにも協力して会議応援、会場での観光案内業務なども行っております。また、お城まつり、よさこい祭りなどイベントへの協力も多方面にわたりますが、最大のイベントはゴールデンウィーク対策で、毎年期間中には延べ百三十人近くが参加して臨時駐車場対策、桂浜・高知



お問い合わせ  
 (財)高知市文化振興事業団  
 ☎873-4365

**第23回市民フロア企画展**

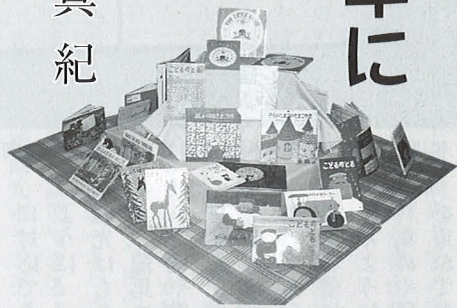
**新世紀の風 I - 高知高校美術部**

2000/8/10(木)~15(火)  
 10:00A.M.~6:00P.M. 会期中無休

高校3年生の美術部員4人(下村貞史・谷川佳誉子・戸梶貴博・吉河都)の絵画約20点を展示。今後の活躍が期待される実力派美術部員の作品をこの機会に是非ご覧下さい。

# よせて こども読書年に

田島真紀



## おはなし会は楽しい

昨年十二月の開館当初から、高知こどもの図書館では、毎月一回、月末の日曜日に「おはなし会」を開いています。午前の部は、絵本の読み聞かせ（読み語りの方がいい感じ）はもちろん、歌あり手遊びあり、パネルや組み木、エプロンシアターもありの賑やかなもので、小さいこども向き。午後は、ストーリーテリング中心で、小学生からおとなまで、ゆったり楽しめる時間です。

おはなし会一週間前の木曜日、手遊び講習会兼打ち合わせ会を開きます。出席するのは、手遊び等を教えてくれる人と当日の出演者（？）、そ

して、当日は出られないけれど、おはなし会に興味のある人や勉強したいという、デビュー前の人々です。

皆それぞれが自分の十八番を習得中ですが、お互いに、聞いたり聞かせたりし合う一時間は、笑い声が絶えません。笑いジワなんかへっちゃら!!

紙芝居や絵本選びは、何よりも季節感を大切にしています。読み合い、組み合わせも考えて、適当なものを探し、プログラムを幾通りか用意しておきます。そして最終的には、おはなし会当日の天候や参加者の人数、年齢等によってプログラムを決定します。ですから時には、読み手も惚れ込み、充分に準備できていたもの



お話の世界に引き込まれるこどもたち

でも、当日の雰囲気合わなければ見送りです。その日の出会いを大切にしたいからです。

じいっとお話に聞き入っているこどもたちの様子や、打てば響く反応は話し手にも楽しく、ストーリー、絵そして言葉そのものの魅力を実感

します。また、こどもは鋭い批評家でもあるので、おもしろくないと見向きもしません。失敗談には事欠きませんが、それも上達の糧ということにして、くじけず続けていきたいと思っています。

おはなし会の帰りに、「さつき読

んでくれた本、どこ？」と、紹介したお話の本を、さっそく借りて帰る姿もよく見かけます。お話を聞くことは、無条件に楽しいものであると同時に、絵本、ひいては文学その他、本の世界への橋渡しにもなるでしょう。

たくさんお話を聞き、お話の世界で遊べるこどもは、自分の世界をもつことができます。自分の心のキヤンパスに、自分の色で描く自由を手に入れる鍵のひとつが、ここにあるように思います。

最近、保育園や幼稚園、小学校や学童クラブ等でも、出張おはなし会が行われています。読み聞かせボランティアの、人もグループも増え、高知市を中心に、連絡会ができました。

## 情報社会と読書

また、小・中・高等学校で、朝の十分間読書を取り入れているところが多くなってきました。実践校の取り組みの様子を読むと、直接の成果と共に、波及効果もあるようで、全国的な広がりがうなずけます。

このように、おとなが、こどもと本の出合う機会をつくることや、本を読む時間を確保してやるという、種まきのような行為が、今は必要な時代といえそうです。

もうひとつ、学校図書館の充実も、取り組まなければならない課題といえます。学校にコンピュータが導入され、こどもたちは良くも悪くもより多くの情報に接する機会を得ます。コンピュータ操作を早期に教える必要はないと思いますが、情報の海を航海するための能力、つまり、自分にとって必要な情報を的確に選択する能力は身につけなければならぬでしょう。

幼い頃からの体験と、おはなし・絵本（もちろん科学絵本も含む）体験、そして、自分で本を手に取り、眺めるところから始まる、積極的な読書体験が豊かであればあるほど、その能力が培われるのではないのでしょうか。

こどもたちは、ジャンルにとらわれず、あらゆる分野から、たくさん本を読むことで豊かな能力を育んでいきます。

ここに、本とこどもをつなぐ人の役割があります。

物語や自然の神秘を本を通してこどもと共に味わう人の存在、そしてこどもたちに「読みたい」「知りたい」「調べたい」という、知的欲求が湧いてきたとき、それをサポートしてくれる人の存在が大切です。その役割は、時によって、家族が、また文庫を開いている人や公共の図書館員や学校図書館の司書、司書教諭などさまざまな人が担うでしょう。

こどもたちが、本と人との関わりをなかで、すてきな出会いを体験できるよう、今年が、そのスタートの年になれば、と思っています。

（たしままき／特定非営利活動法人高知こどもの図書館理事）



おはなし会で熱演する出演者

# ぐうの音も (二)

—詩作りと誌作り—

西岡寿美子

才能は、生まれつきだろうか。取っ付きにくいと敬遠気味だった詩の分野も、だんだんに市民権を得て来て、わたしが先頃まで携わっていた新聞詩壇も、大勢の投稿者で大変に賑わって来た。これは喜ばしいことだが、戸惑うのは、ごく初心の人が、自分はモノになるだろうか。才能がないようなら止めたい。などと性急に言っ来られることである。止めなさい、とも、続けなさい、とも、わたしは言わない。それは、人の能力は、本人にさえも見極められない。そんなに簡単に言い切りの出来るほど底の浅いものではない、と思うからである。つまりは、納得の行くまで試しもせずに、見切りを付けようとするところが、その人の限界であろう。殊にも賽の河原の石積みのように、積んでも積んでも形にならず、労も多ければ、出費も多い表現の世界のこと、反対に、「やる」と、意気込まれても、「さあさあどうぞ」とも言い兼ねる。打ち割ったところ、千人に一人もモノにならない実情であらう。

才能(三分)のことを言うなら、もって生まれたものはごくわずか。九%までは努力の成果だろう、とわたしは思っている。生得の差は精々百分の一。じわじわと長い時間を掛けて一事に精進していれば、それ位の差は詰められよう。兎に対する亀の戦法が最後には勝ちを占めるものである。造形(絵・彫刻・字)や音感などは、他に比し幾らか天分の差が多そうに思える。それとても、後天的な開発をしなければ宝の持ち腐れだろう。つまり、人は錬磨で大化けに化けるのである。言葉による表現でも、ただただ精一杯生き、感じ、考え、読み、書く以外にない。足の鈍い亀でも、居眠り兎を追い越す道理で、持続力の有無そのものが、才能、であるのかも知れない。好きでやれば、利害がどうの、時問がどうの、労がどうの、とこぼすまい。凡庸な才も積み重ねで非凡になり得る。才能を云々する前に、時問も、労も、金も、賭けなければ

(賭けても)、モノになりはしないのである。映画や演劇で、主役は主役なりに華があるが、演技はいかにもデクノボウ。脇役の実に味のある洪さが、後々まで記憶に残ることが往々にある。作品も、ただに才で書いたキラキラはその場限りだが、永い習練で鍛え込んだ筆には、目を惑わす綺羅はなくても、自ずから滲み出て来る深い滋味で、人を惹き込む力を持つ。わたしの知る範囲でも、沢山のキラキラする才能が出た。これは凄い、今に詩界の中枢になるだろう、と瞳目したが、なぜか、そういう人はみんな消えて行った。見るからに鈍で、終始調わぬ出発をして、叩かれ、嘲笑された人が、深い蓄積をしのぼせる、滋味掬すべき作品を発表しているのに出会うと、ああ、立派、と目頭が潤む。生来の才能の多寡ではなく、愚かなまでに没入して迷わぬ人の上に、美神も微笑むのであらう。

にしおかすみこ／詩誌「二人」

編集発行人

# お誕生日

上田真弓

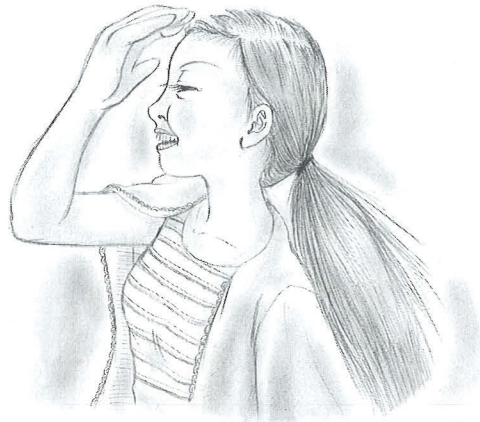
梅雨入りする六月に誕生日を迎える私は、今年でなんと三十四歳。自分の年齢にただ驚くばかり。子供の頃、私がみた三十四歳は大人であったように、自分の姿は子供たちからみれば大人なのだろうか。誕生日には誰もが「おめでとう」の言葉をくれ、私は「ありがとう」とお礼を言う。大学生になり親元を離れた時から、「お誕生日をありがとう」と、両親に電話をかけるようになった。離れてみると改めて親の有り難さを実感し、好きなことをやりたいようにやらせてくれる両親に感謝だなあと強く思うようになったのである。初めて病院で誕生日を迎えた夜、同じような電話をした。そして、「こんな運命に産んでしまったのに、そう思うてくれるか？」と、電話の向こうで涙声の母親。こんな姿になったのも、この運命も決して両親のせいではないのに自分たちを責めている。この言葉を聞き、これ以上の親不孝はしてはならない、私にできる親孝行をしていこうと強く決心をした。

平成元年の交通事故以来、五体満足の身体を失ってしまった。意識不明の私を見た時の両親の姿を想像すると胸が痛む。誰のことも悪く言わず懸命に世話をしてくれる父親、「この手で幸せをつかめ、幸せをつかめ」と、私の手のひらを洗ってくれる母親。今の私がそれなりの幸せを感じて生きていられるのも、私の両親が私の両親であってくれたから。だからこそ誕生日は、両親への感謝の気持ちを込めて「ありがとう」を伝えたい。人それぞれに歩みたい道はあるけれど、時とし

てそれは自分の思うようにはならない。その時にいろんな壁を乗り越えてこそ、再び生きていることの喜びを見いだせる。

人は一人で生きてやしない。誰かが必要とし、また誰かに必要とされている。そのことさえもわからなくなると、生きることまでも無意味に思えるのかもしれない。しかし、この世に生まれてきた以上、この世を生きる使命が与えられているのだと私は思う。そう、誕生日はその大切なスタートだ。

うえたまゆみ／近森リハビリテーション病院  
医療相談室・医療ソーシャルワーカー



(賭けても)、モノになりはしないのである。

映画や演劇で、主役は主役なりに華があるが、演技はいかにもデクノボウ。脇役の実に味のある洪さが、後々まで記憶に残ることが往々にある。

作品も、ただに才で書いたキラキラはその場限りだが、永い習練で鍛え込んだ筆には、目を惑わす綺羅はなくても、自ずから滲み出て来る深い滋味で、人を惹き込む力を持つ。わたしの知る範囲でも、沢山のキラキラする才能が出た。これは凄い、今に詩界の中枢になるだろう、と瞳目したが、なぜか、そういう人はみんな消えて行った。

見るからに鈍で、終始調わぬ出発をして、叩かれ、嘲笑された人が、深い蓄積をしのぼせる、滋味掬すべき作品を発表しているのに出会うと、ああ、立派、と目頭が潤む。生来の才能の多寡ではなく、愚かなまでに没入して迷わぬ人の上に、美神も微笑むのであらう。

にしおかすみこ／詩誌「二人」

編集発行人

# 乗らんでよかったあ〜。

(平成11年 東洋町白浜)

水上 淳



旅行帰りのこと。悪天候のニューリスに、利用するつもりだったフェリーを避け陸路に変更。途中、甲浦を通って仰天。ニュースを知ってさらに仰天。思わずもろしたセリフ。

花よりさきに実のなるような種子よりさきに芽の出るような夏から春のすぐ来るようなそんな理屈に合わない不自然をどうかしないで下さい

(高村光太郎)

## あるがまま



風俗歳時記

つい先日まで寒さに震えて陽光を待ち望んでいたのに、はや、ギラギラするような太陽の季節である。異常気象などといわれながらも、季節の移ろいは律義なほど着実である。この律義さが和歌や俳句を育み、一方で自然への信頼を生む。「冬来たりなば春遠からじ」と、じっと耐えるのは自然を信頼しているからである。だから「自然」という言葉が「あたり前」、「不自然」という言葉が「理屈に合わない」という意味を帯びてくる。

自然の特徴の一つは、規則正しい「繰り返し」である。毎日朝があり、毎年春が来る。規則正しい繰り返しがあからこそ、私たちは未来を予測することができる。「予測」などとは言わ

(略)

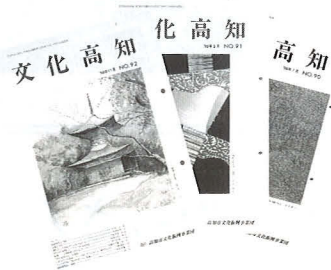
## 賛助会員募集

年会費2000円でどなたでも入会できます

ご入会いただくと……

「文化高知」を年6回お手元にお届けします。

事業団発行の書籍を10%割引いたします。(事業団で直接お求めの場合)



お申し込みは……事業団にお電話でどうぞ。次号に郵便振替の用紙を同封してお届けいたします。

### 今号の表紙

「鬼灯」 大黒 郁代

この作品は、グループ展に出品するために描いたものです。仕上げの段階で思いのほか時間がかかり、太陽の位置が次第に移動し、机の上に置いたほおずきの、光と陰のバランスが微妙に変化して来て、あわててしまったことを思い出します。(おおぐろいくよ)



「町を美しく」するために、ひとりひとりが身近にできることは何だろうか。空き缶やゴミを道路に捨てない、吸い殻のポイ捨てをやめる。あたりまえのことだが、それだけでも実行されたなら、高知の街は今よりもずっと美しくなるはず。写真は市内某所の歩道である。本当に「町を美しく」したいのであれば、すぐにできそうなことがここに写っているのではないだろうか。

### 風俗

## 大蛇藤

5月16日(芭蕉が「おくのほそ道」へ旅立った〈旅の記念日〉)、香美郡香我美町舞川へ〈大蛇藤〉を見に出かけた。大蛇藤は、高知新聞社刊『高知の花紀行』の〈フジ〉の部に、唯一紹介されている「風格あふれる大フジ」。

浮かべたうどん。ほろ苦いユリ根と山ウド。あるじは、俗塵をはなれたこの秘境にいかにもふさわしい、仙女を想わせる。茶店の横手の坂を登ると、公民館があり、5月の行事予定を書いた黒板に、「ベタンク大会」とあるのを発見して驚く。この藤源郷に、フランス文化の風が吹きこんでいる。

仙女は、その種の催しが行われる、キャンプ場やバンガローなどの管理人も兼ねている。

樹下にある大きな淵に、その昔、大蛇が住んでいたと伝えられる。折しも、フジは満開。青紫色の花が新緑の若葉に映え、甘い薫りを漂わせていた。

厳冬の風のない穏やかな朝、溪流のわたりの杉林いちめんに、凍てついたピー玉状の露が、朝日を受けて七彩にきらめく、という。

フジを眼前に仰ぎ見る、溪流茶屋へいながらくで一服。ひとひらのフジの花びらを

(念)



# 清流を子らへ

— 21世紀に残したい鏡川 —



高知県河川環境研究会編

A 5 判・並製本・122頁

本体価格 1,000円

時代とともに急速にその姿をかえる鏡川。その変貌ぶりを憂い、何とか清流を復活させ次代の子どもたちに残したいと研究会メンバーがおくる熱いメッセージ。

# やっさんの わくわく動物記

中西 安男 著

A 5 判・並製本・192頁

本体価格 1,800円



カモシカ、ムササビ、ハクビシンなど私たちの日常生活の中でちょっと気をつければ出合える野生動物たちやアニマルランドの仲間たちの生態や習性・個性が著者の目を通していきいきと描かれる。読みものとしておもしろいだけでなく手軽な動物ガイドブックとしても最適、野生動物がさらに身近なものとなってくる。